

和歌山での思い出



札幌市医師会
手稲溪仁会病院

杉原 暁美

今年で北海道に移住して12年目となります。来道した当初は数年後には内地に戻ると思っていたのですが、一年もせずに札幌に居を構え定住することとなりました。

北海道に移る前は和歌山で生活しており、そこで二人の子どもが生まれました。子どもたちは乳児期から自宅近くの保育園に通わせ、仕事はパートでしたが、すぐに復歸しました。子どもが一人の時は自転車で送迎していましたが、二人となるとそれは困難でした。というのも和歌山の保育園ではお昼寝布団は毎週持参しなければならず、二人の子どもを乗せて普段の保育グッズと一緒に布団を運ぶのは不可能でした。こちらの保育園ではバスタオルだけ用意すればよく、とても助かりました。また和歌山は古くからの城下町ということもあり、保育園周囲の道路は車一台が通るのがやっとの路幅しかなく、しかも脇には蓋のない広い側溝まであり、車での通園はとても緊張しました。北海道での最初の生活は苦小牧でしたので、道路の広さに感動したことを今でも覚えています。和歌山の狭い道路ではもし南海地震が来たら道路がふさがれ、子どもたちを迎えに行くのは困難だといつも考えていました。

子どもを車で送迎するようになってからは、子どもたちにチャイルドシートを装着するのに手を焼き、なかなかシートに座らない子どもたちといつも格闘していました。お迎えの時刻が保育園駐車場の裏に住むご夫婦の犬の散歩時間と重なり、何度も私が子どもたちと格闘する姿を目撃されていました。そんな姿を見かねてそのご夫婦が声をかけて下さり、子どもたちは犬と仲良く触れ合ってから大人しく帰宅することが多くなりました。

そして、登園最後の日に北海道に転居することを伝えたところ、なんとご夫婦の息子さんが元日本ハムの選手だったことから、息子さんの日ハムの野球帽子を餞別に頂きました。ただ、そのご夫婦のお名前をきちんと伺っていなかったのが、どの選手の物なのか分からないのが今でも気になっています。息子はその帽子をととても気に入り愛用しています。市販されている帽子は後ろにアジャスターが付いており、選手用はアジャスターがなく、後頭部のところにNPBの刺繍が入っていると息子から聞き、日ハムの帽子を被っている人を見かけると何気なくチェックしてしまいます。

子どもたちは小さかったこともあり和歌山での記

憶がほとんどなく、今ではすっかり道産子となりました。私自身は北海道を第二の故郷として、こちらでの生活をこれからも楽しむつもりです。

